

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520701

研究課題名(和文) 英語教員の技能診断システム試行版 - 現職教員との共同開発および構成概念妥当性の検証

研究課題名(英文) Developing and validating a pilot version of the diagnostic assessment system for language teacher proficiency in cooperation with in-service teachers

研究代表者

渡部 良典 (WATANABE, YOSHINORI)

上智大学・外国語学研究科・教授

研究者番号：20167183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本申請は、外国語としての英語教員診断システムを開発することを最終的な目標とした。以下の3点について十全な成果を上げることができた。1) 現職教員11名に対してフォーカス・グループ・インタビューを行い、学部の教職科目の有効性を確認した。また合わせて改善すべき点を確認した。5時間分すべてを録画し、文字起こしを行い、詳細に分析した。2) 教員に必要とされる資質について、日本、台湾、韓国の教員にアンケート調査を行い、比較検討をした。3) 現職教員、英語教員のための教職科目履修生に英語教員能力検定試験(TKT)を実施し、客観的な診断の指標としての使用可能性を探った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present project was to develop a pilot version of the assessing system for diagnosing the skills of EFL teachers in Japan. The project produced useful outcomes in the following three areas. 1) A focus group interview was conducted on the total of 11 in-service teachers and examined the effectiveness of teacher development courses they were enrolled in when they had been students. In so doing, the entire session was recorded on the DVD and transcribed for in-depth analyses. 2) Questionnaires were sent to the group of EFL teachers in Taiwan and Korea as well as to the counterparts in Japan and compared their views about the nature of language teacher proficiency. 3) TKT was carried out to more than 60 pre-service and in-service teachers and examined if the test would be useful for diagnostic purposes. The results were returned to the test-taker in the form of score report containing the suggestions for improving their teaching skills.

研究分野：外国語教育評価

キーワード：英語教員 教員志望学生 英語力 指導技能 教員としての資質

1. 研究開始当初の背景

教員評価は主に採用試験で行われる。しかし、教員採用試験の内容および方法が、実際の教育現場で必要とされる指導技能の内容と乖離しているすなわち妥当性が低いというのが前回申請の調査成果のひとつであった(課題番号 20520521)。その帰結として、教壇に立った新人教員は様々な問題に直面するにもかかわらず、教職科目履修時に得た知識や技能を運用して解決策の手立てを得るということができない。そしてこれはベテランの教員でも大きくは異なる。

2. 研究の目的

本申請の目的は以下の3点である。1)日本の中学、高等学校で教鞭をとる英語教員の指導上の問題点を診断するためのシステムを開発すること。そのために教員の生の声をボトムアップ式に聞き取り、反映させた内容にしたシステムを共同開発する。2)問題点の特定(診断)だけではなく、教員の日頃の問題点を意識化することにより解決策を講じる手立てを提供すること。そのために教員志望者、新任教員、ベテラン教員3者の間を研究者・大学教員が媒介役となって相互関係を持たせ互いに学びあう交流の場を提供し教員養成に貢献する。3)言語教育における評価研究に国内外の研究の実践および理論研究に貢献すること。学習者の診断のみならず教員の診断という視点から診断評価の妥当性を新たな視点から見直す契機とすることを意図して進めた。

3. 研究の方法

本申請は、面接、質問紙、授業観察を手段として使いながら指導上の問題点の診断と問題解決のために最大の効果を上げることのできる診断システムというソフトウェアおよびその運用システムの開発を目的とした。教員に必要とされる知識や技能は限りなく広いが、しかしそれにもかかわらず通常診断を行うということは必要とされる技能や知識がすべて明らかになっていることを前提としている(Stodolsky, 1984)。確かに、教員の資質については言語能力、指導力、対象言語に関する知識などに分類され、授業観察用にチェックリスト形式を作成するということが行われている(Richards & Nunan, 1990; Bailey, 2006; Coombe 他, 2007; Stronge, 2002 等)おり、ケンブリッジ大学の Teacher's Knowledge Test 等の教員検定試験もある。それでも尚効果的な指導というのは相手すなわち学習者があって定義できることであり、優れた教員の資質は簡単に規定できるものではない(e.g., Gebhard, 1984)。

そこで、本プロジェクトでは教員の生の声をボトムアップ式に聞き取り、反映させた内容にしたシステムを共同開発することを目的とした。実際の教育現場において教員が日々格闘しているのは、実際に具体的な生徒を前にし、保護者に対面しながら、同僚と悪

戦苦闘を重ねるといった広い意味での教育活動を通して得た実体験を通してである。理論的な枠組みは必要であるにしても、具体的で実践的な内容にするためには現職教員の直接の体験を採集することが欠かせない。効果的な指導法やそれに必要な知識、技能が客観的に存在するということは前提とせず、個人の教員が「うまくゆかない」と主観的に認識した問題を特定するプロセスを診断(diagnosis)と呼ぶことにした。しかし、それだけでは個人の問題を解決するだけであり汎用性は得られない。そこで、個々の教員が認識した問題点には共通性が認められ、従って共通の問題解決方略を確立することができるはずだということをも第二の前提として調査を進めた。

4. 研究成果

本申請は、外国語としての英語教員診断システムを開発することを最終的な目標とした。従来の試験作成プロセスとは異なり、問題点の特定から妥当性の検証まで開発の全段階において現職教員の声を反映させる点を最大の特色とした。また、英語能力のみならず指導法、対人関係対処能力など、教員として必要とされる資質も対象とし、現場の教員が実体験を通して、必ず必要であると認識した適正、知識、能力、技能を、面接、質問紙、観察という一連の方法を運用することにより第三者の目を通して客観化しそこから得た情報を言語教育実証研究の成果を援用しながら診断評価のためのシステムを構築することを目的とした。以上の目的を100%達成することはできなかったものの以下の3点について成果を上げることができた。

- 1) 現職教員11名に対してフォーカス・グループ・インタビューを行い、学部の教職科目の有効性を確認した。また合わせて改善すべき点を確認した。5時間分すべてを録画し、文字起しを行い、詳細に分析した。
- 2) 教員に必要とされる資質について、日本、台湾、韓国の教員にアンケート調査を行い、比較検討をした。
- 3) 現職教員、教職科目履修生に英語教員能力検定試験(Teacher's Knowledge Test, TKT)を実施し、客観的な診断の指標としての使用可能性を探った。

以上の成果から、80%の達成度と自己評価する。残りの20%は結果の解釈が十分になされていないことである。データを本申請終了後もさらに分析しいずれはまとめて公開する予定であるが以下に略述する。

1) フォーカス・グループ・インタビュー

文字起し資料および観察結果が示す通り、非常に情報量の多い有意義な試みとなった。有意義という意味は教職科目担当教員にとって有益であったということだけではなく、このように同じ教員養成科目を履修した現職教員同士が経験を得たのちに、振り返る機会を持つこと自体が診断の意義をもつとい

う意味でもある。本申請調査の当初の目的を十分に達成したということができる。なお、実際の文字起こし資料は 42,122 文字 52 ページにわたる。以下はその部分である。

発見のまとめ: 懇談会文字起こしからの参考意見抜粋(順不同)

教科書が従前より厚くなったので創意工夫してやっている。私学では授業の創意工夫は教員に任されている。私学では新しい授業作りに周りが柔軟である。教科書を中心に授業をやるのに大学の授業ではその関連の授業がすくない。文学部出身なので教科書の扱いなどはまったくやっていない。実習校(大学付属校)と現実のギャップが大きい。大学では言語材料の習得にとどまらないでそれを用いてどのように活動させるのかを学んだ。しかし現場では実際に教科書を用いて授業をするのでどういうふうにするのか実際の授業をみたかったし今もみたい。習得に関わる授業が多いのでそれを用いる(活用)する授業がみたい。現場の研究会の発表は表現系が多い。理解の活動などは提示されない。不満である。一回の授業をみてもよくわからない。もっと単元全体の授業がみたい。大学のカリキュラムではなくても学校の授業が継続的に参観できるプログラムがあればありがたい。実習では学習規律などの学習環境が整ったところでやりたい。そうしないと根幹の授業の実習にならない。小学校の外国語活動ではALTが英語学習で担任は学習規律などを整える役割分担がみられる。大学の授業で協同授業(チームティーチング)がない。設定されたい。大学では理念的なこと現場では実際的なことになっているが両方の合わせ技を学習したかった。大学の授業では「省察の手法」が生かす術を教えてほしい。そうすれば自分で授業をやったりみたりしたときに自分で研究できる。

小学校外国語活動の授業に関する講義がなかったのでも現場で苦戦している。大学では同僚と授業を作るという経験ができない。現実的には同僚と授業をつくる場面が多い。現実とのギャップである。新任時代は失敗する。これを生かすようなアドバイスがほしい。そうでないと萎縮する。メンター制度。メンターの資質。対人コミュニケーション能力が必要。対人バランス。時間をかけて学びとっていくこと(子ども理解)比較的短い機関で習得(技法的なことか)できることを区別して育成する。子ども扱いに理念は大学で扱いの技法は経験的に現場で。同僚間の指導理念や方向性は統一できるようにしたい。生徒指導にはナイーブな点が多くあり実践的な経験が必要。生徒指導の指導の理念は同僚間ですり合わせが必要。メンターとか teacher trainer を求める新任は多い。そうなるのであれば信頼される人物が必要。教員どうしの関わりが少なくなってきている。そういう中で同僚性を育てるのは難しい。現場の経験不足のために何でも積極的に吸収するものは大切であるがその一方で個性も大切にしたい。大学の学習や理論は役に立たないではなくそういう学習経験を積んだ新任の教員にはもっとよくなるという方向でアドバイスしてほしい。否定するのではなく。指導教員を「とりあ

えずベテランでとか退職再任教員で」ではなく育てる資質に長けた人材を当ててほしい。新任に直接的に関わる人物が重要。組織が人材を育てる環境にないと新任の負担感は大きい。対人関係能力が大きく求められる。これはどこで育つのか。大学生が教室の先生との関係性だけで育つてくると汎用的な対人関係能力とならない。教科力も生徒指導力も一気に求められる。飲み会など非公式の場での本音と建前に驚くことになる。自分の良さ自分の持っていた自信がつぶされていくから新任で辞めていくことになる。自分の良さが本当は良さではないのかもしれないという初めての経験をあじわう。指導教員との関係性が問題とされる。肯定され受容されて育った新任教員が初めて現場の価値観の違いに驚く。

「割り切る」必要性を求められることになる。1年目はとにかく聞いてもらいたいなんでもアドバイスがほしいという感じになる。授業ですかれる教員が重要か。授業ですかれず授業外ですかれる教員の有り様も疑問。生徒指導能力は1年目の第1日目から求められる即戦力である。友達らしさと先生らしさのせめぎ合いになる。児童生徒の多様性への対応指導のあり方は大学カリキュラム上はない。親子・社会の変化価値の多様性などへの対応のあり方に関する授業は教育学・教職科目で対応か。実践的な課題解決型のもはケーススタディ科目の設定が必要か。TAといった実践観察型の勉強は授業科目・非授業科目として設定するのか。大学の学習はあくまで理念型にとどめるべきかそれとも実践型を組み入れるのか。大学ではあくまで教員とはすばらしい職業であるというスタンスを崩さないこと。

新任教員がなぜ辞めていくのか何が原因か? 県教委に聞いてみる。人事課は把握している。

新任教員が辞めていくような時に原因があるのかそれに対して大学に何が出来るか。これは辞めていく理由が明らかになれば大学のすべきことも見えてくる。大学で学力・人物ともにリーダー格の2人の教員が極めて対極的な意見を述べている。対極点にある内容について追加調査が必要? 大学は生徒指導も教科指導も理想的・理念的なことに偏っているとの指摘。単位化が必要になってきている。単位がでるとでないのでは向かう意識が違ってくる。大学においては全体に英語の科目の勉強が不足した。大学1年生に対して教員になるにはどういう勉強がどの程度どのように必要かを教える必要がある。英語の学力検査は自分の学力を知る指標になるので好ましい。大学生には検査の目的が目的と一致して機能してくるのか。おそらく教えるという将来のイメージがでてくるので自分の英語力を判定する意識が高まってくる。スピーキングパートナー式の学習法の紹介。英語教員になりたいという目的意識が高いので大学入試にパスすれば勉強は終わりと言うのではなく教員に必要な英語力の指標がほしいという希望がでてくる。英語教員になりたいのなら英語力を磨きなさいという「かけ声」だけではなく具体的な学習機会を設定すべきである。大学入学後に英語教員ではこれくらいの力量が求められるということを実際に目で確認

させるべき。またそのイメージを実現させるための具体に手順を提示したい。イメージを持たせることは必要。英語力を判定し実力をすることも必要。それ以外の勉強は自分でやるべき。大学になんでも求めるのはおかしい。大学では英語を使う必然性を設定しそれに学生を流し込むのがよい。

海外留学はあくまでオプションである。国内大学でもっと学べ。大学では英語で学ぶ必然性英語を使う必然性を全面に出して教えるべき。英語を使わないからどんどん落ちている不安がある。

小学校英語活動では海外で英語を学べば英語使用の楽しさを教えることになってスキルの問題に終始することはなくなるだろう。大学では教員になりたいという気持ちや教員の理想を失わせないこと。教員に必要なのは人間力 教師力 英語力だ。教員採用試験のときの書類に書いた教員志望の気持ちを保持させてほしい。期限をまもるといった小さなことで大学と社会では考え方や人間評価につながる意識が違う。こういう点はきっちり教えるべき。授業では英語力があってその他の能力が追従するのが人間力などあって英語の授業ができるのか？生徒指導の問題では倫理的にどう考えるかと指導としてどう考えるかは違う。生徒指導では共感することが求められる。何かの指導で一度でも逃げた指導するのはよくない。そうすると一生の問題になって指導できなくなる。自らに厳しい人格が必要ということか。教員になる夢を失わせないことできるだけ多様な体験をさせてすぐに答えがなくても構えを作っておくことは大切。教師の視点でものを見るように訓練すること。対人関係が複雑になる。大学の学習でも同僚との協働性を高める必要あり。大学には英語力もさることながら教師としての幅のひろい力の養成を期待してことがわかった。

文字起し資料(部分)(xxx=聞き取り不可能)

----- (略) -----

教員A：しかもレベルが高いので、求められる、能力が高くて。そこまで育てなかった自分も悪いんだけど、でも無理かな、けっこう、自由にやってくれみたいなどころもあって。そんな自由に英語で会話ができないから、ちょっととばしはしないけれど。

教授(進行役)：教科書は中心的な部分であるので、A 高校なんかだと、少し状況は変わってくるかな。つまり、教科書だけでいいの、教科書に、おrikえさせたり、発展させたり、するためにxxxを使ったりとか、xxx そういう仕事はできませんかね。

教員B：ただ一方で教科書を教えるじゃなくて、教科書を使って何するか考える、というほうがベースなので。xxx、同じ教科書でやっても、全然使っているプリントも違えば、プリントを使っていないところもあれば、ずっと音読やっていますというところもあれば、読解メインでリーディングをxxxひたすらやらせて、教科書でできたパッケージとは、もともとオリジナルの原文にあたって、それを読ませたりとか、本当に活動が多岐にわたっているの、これっていうのはみえないですね。

教授(進行役)：教科書xxx、小学校はきちんと教科書ベースで、だんだんだん、プラスアルファ、

こう中学、高校でxxx。教科書がベースになってxxxがいろいろでくるっていう感じかね。

教員B：テストは自分がやった授業に基づいて、あのテストを先にみえるようなかたちにして、僕らの場合だったら、偏差値xxxいわゆる難しい学校なんですけど、もう、ばあーと英語を読ませて、音読ずっとさせて、で、音読して分かった内容とかを聞いたりとか。xxx。教科書が伝えたいことが多分あると思うんで、それは全然ちゃんと勉強しないといけないと思うんですけど、それをどういうふうにしてそこまで引き上げてあげるのかという、アプローチがたぶん全然ちがうはずなんでけど。

教授(進行役)：大学のときに教科書をどう使うかという部分についてどうですか。大学で教科書の扱いが全然違うっていう感じじゃない。小学校と高校のときと。そうすると、教科書に関わる、どう使うかっていうあたりの授業はありましたか？

教員F：まず教科書に触ってないよね。あれ？触った？

教員G：先生がプリントアウトしたやつだけみたいなの。

教員G：実習のときはどう使うかということはある程度勉強してない。

教授(進行役)：実習のときはひたすら授業をやる感じ。

教員A：付属中学校で実習だったので、例えば、本文をそんな細かくいちいち訳とかしなくてもやってきてるし、分かっているでいて、いろんな文法項目使ったアクティビティしたりとか、を実習でやったけど、今の学校で、公立の中学校でそんなことしたら教科書何やってみたいになるので、そんなにほっとけないですよ。本文を。どうやったら本文を、こう、適切にかつ効率よく扱えるか、すごい悩んで、今、なんか、ちょっと和訳を3分の1ぐらい、いれて、あとは自分でやるようにしたりとか、ちょっと何回かこころパターンを変えてやるようにしているんですけど、内容についてどうやって発展させて、授業を進めていいかわかんない。実習とは全然違うところにぶちあたってる。

教員C：実習ではその教科書の本文的なことは扱う、ほとんど、言語材料使ってどんな活動するかということにすごい時間をかけていて。いざ現場立って、そういう授業はイメージがあっていろいろ工夫できるんですけど、じゃ教科書をやるうって時にはけっこうどんなやり方あるんやろうみたいなの。他の先生の見てみたいなの思いながらも、どんどん自分がやるしかないかな。あんまり他のひとの研究授業でもされないから。

教員A：されないからもっと知りたい。それがつまらないと思われているから。大事なのにそこからの発展の授業をすごい、いっぱいみてきたけど。すごいそれはわかる。もっとやってよって思った。

教員F：連携とかでも、やっぱりそのスピーキングとかの部分連携していこうみたいが強くて、なんかわかんないんですけど、中学校の公開の授業にいても全部、生徒がどうやってスピーキングしていくとか、発表会みたいのとかがばかりで、リーディングの部分は全然みさせてくれないので、なんでだろうなって。

教員B：みせても面白くないって言ってましたよね。実際。

教員 A : 和訳してるんだらうなあ。一年生だと xxx。二年生、三年生はそういかないから。xxx。

教授 (進行役) : それを大学のカリキュラムの視点から考えると、実習校を複数化するとか、あるいは一般の学校と付属とか、変わった、同じようなタイプの学校ばかりやるんじゃないくて、いろいろなタイプの学校を研究させるとかかな。

教員 B : できれば、一つの授業をみて見れるのが、嬉しいですね。いつも研究授業で見せられるのが、ポストリーディングアクティビティ、一番読解が進んで、進んで、それを自分でアウトプット、自己表現できる、一番、その生徒の意見がわかる、一番楽しい授業なんで、公開されるんですけど。そこまでに引き上げてきたその xxx、そこまでのもっていき方もわかるし、どういふふうに教科書の内容をインプットをインテイクさせてから、それを練習させて、というところを見れるので、大学でやるんやったら、それをなんか、できれば毎週、足運んででも、見られるようなかたちのほうが、嬉しいかな。なかなか毎回見せてもらう機会がなくて。大体公開授業 xxx、自己表現してるばかりで。

教員 A : バリエーションが知りたい。一個の方法じゃなくて、その理解させていくにも、リーディングの方法一つとっても、バリエーションが分からなくて。それだけで、三年間やるわけじゃないので、いっぱい見せて欲しいし、いっぱい知りたい。

----- (以下略) -----

2) 日本、台湾、韓国の英語教員アンケート調査

アンケートは当初作成した草稿版と実際に使用した改訂版がある。本申請調査の目的は、客観的なデータを収集することではなくむしろアンケートに答えることにより自らの指導を振り返ることにある。数値上のデータ分析は今後さらに進める必要があるが、今回はむしろ現職の教員にアンケートに回答する機会を与えること自体に意義があった。このことから十分に目的を達成したということができる。

3) TKT 実施調査分析結果

TKT は本来英語教員の知識を客観的に測定することを目的としたテストである。本調査は、このテストが本申請の目的とした診断にも使いうるかどうか (妥当性) を検証した。3種類の本モジュールのうち、授業運営に関する知識を測定することを目的とした Module 3 を使用した。合計 69 名に実施した結果、授業運営に関する知識の他に、英語力および学習者との人間関係を構築することに関する実践的知識を同時に測定していることが観察された。この3要素が必要とされることは、これまでに行った調査から予測されたことであったが、TKT のようなペーパー・テストを行うことによりどこに問題があるのかを特定することは困難であることが明らかとなった。また、テスト受験についてのコメントも収集したが、組織的なデータ分析は今後行う必要がある。統計的な分析結果についてはすでに別の機会に行っているため、本報告

書には受験をしてくださった協力者に試験結果とあわせて送付したスコアレポートを添付する。本調査の目的の一つである指導法の診断結果として参照されることを期待して作成したからである。

TKT Module 3 スコアレポート (部分)

Score _____ (Each question carries 1 mark.)
 Purposes of teachers' classroom language (8 items; #1 - 8)

Question	1	2	3	4	5	6	7	8
Key	B	E	I	A	G	H	C	D
Your answer								

(以下略)

Module 3 Version 7

The specification of each section

Task 1, Questions 1 - 8: This task focused on identifying the purposes of extracts of classroom language spoken by teachers. Candidates were required to match teachers' language to classroom purposes. The task was handled well by stronger candidates but posed a few problems for weaker ones. This seemed to stem mainly from a lack of understanding of particular terms i.e. in **B eliciting**, in **C mingling**, in **G jigsaw task**, in **I concept checking**. While Part 1 of Module 3 focuses on the role of language in classroom management, candidates need to understand terms related to methodology, as much management is often concerned with the organisation and putting into practice of different aspects of methodology.

Task 2, Questions 9 - 16: This task focused on teacher's use of language, and particularly on its suitability and effectiveness for managing learning. Candidates needed to match a teacher trainer's comments on a teacher's instructions to examples of the teacher's instructions. The task was generally well answered, though weaker candidates struggled with Questions 10 and 11. Candidates need to remember that language may be unsuitable not just because it refers to actions that were unsuitable but also because it may itself be unsuitable or inappropriate. This is the case in these two questions where the language used is too technical for its audience of elementary learners in Question 10, and rude in Question 11. There was also evidence suggesting that weaker candidates may have based their answers on part of an option rather than ensuring that the whole option matched. This was the case for B and E, both wrongly matched to Question 15, for example.

(以下略)

< 引用文献 >

- Bailey, M. K. (2006). *Language teacher supervision*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coombe, C, Al-Hamly, M, Davidson, P, & Troudi, S. (Eds.) (2007). *Evaluating teacher effectiveness in ESL/EFL contexts*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Gebhard, J. G. (1984). Models of supervision: Choices. *TESOL Quarterly* 18 (3), 501 - 514.
- Richards, J. C. & Nunan, D. (Eds.). (1990). *Second language teacher education*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stronge, J. H. (2002). *Qualities of effective teachers*. Association for Supervision and Curriculum Development: Alexandria, Virginia.

Stodolsky, S.S. (1984). Teacher evaluation: The limits of looking. *Educational researcher*, 13, 11-22.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

加納 幹雄、英語教員の海外研修成果の還元を教員ライフステージに位置づける方策に関する研究、中部地区英語教育学会紀要、査読有、43号、2014、59-64

加納 幹雄、海外長期研修経験を有した英語教員の研修成果の還元に関する研究、日本教科教育学会誌、査読有、36号、2013、37-47

加納 幹雄、授業づくりの基礎・基本、英語教育、査読無、4月号、2013、22-23
Yoshinori Watanabe, Profiling lexical features of teacher talk in CLIL courses—The case of an EAP programme at higher education in Japan. *International CLIL Research Journal: Special issue - CLIL in Japan: beyond the European context*. 査読有、2(1), 2013, 4-18

渡部 良典、ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)からみた上智大学外国語学部学生の複言語能力自己評価、上智大学外国語学部紀要、47、2013、査読無、211-234.
Yoshinori Watanabe, Test review: The National Center Test for University Admissions. *Language Testing*, 査読有、30(4), 2013, 565-573

渡部 良典、サピア、イエスペルセン、国際補助語、日本エドワード・サピア協会紀要、査読有、27、2013、41-47

Yoshinori Watanabe, Teaching a course in assessment literacy: Its rationale, content and effectiveness, *Research Notes* 査読有、46, University of Cambridge ESOL Examinations, 2011, 29-34

渡部 良典、指導・評価・改善のサイクル：日々の授業に評価を生かすために、英語教育、査読無、2011、5月号、13-15

〔学会発表〕(計4件)

Yoshinori Watanabe, Developing and assessing language teacher proficiency. Second/Foreign language teaching & teacher development. Paper presented at AILA World Congress, August 12, 2014, Brisbane (Australia)

渡部 良典、言語テストの波及効果、ブリティッシュ・カウンシル助成金によるIELTS 波及効果の調査会、2014、3月6日、東京大学駒場キャンパス(東京都、目黒区)

加納 幹雄、授業に必要とされるグランドデザイン、2013年1月23日、愛知県三河地区高等学校英語研究会、刈谷市総合文化センター(愛知県、刈谷市)
Mikio Kano, A Few Key Concepts Directing

Japanese English Education、The International Conference in Memory of Dr. Liang Shih Chin, October 22, 2011, National Taiwan Normal University、台北市(台湾)

〔図書〕(計5件)

上智大学 CLT プロジェクト(編)、渡部良典、英語学習評価の5W1H—コミュニケーションの手段としての学習評価(120-123)『コミュニカティブな英語教育を考える』、2014、198、東京：アルク
渡部良典他、上智大学出版、『CLIL内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦第2巻』2012、277

村野井仁・渡部良典、他、成美堂、『統合的英語科教育法』、2012、240
渡部良典他、上智大学出版、『CLIL内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦第1巻』、2011、194

西田正・石川祥一・斉田智里(編)、渡部良典、大修館書店、英語学力評価論(3-29)『テストと評価—4技能の測定から大学入試まで』、2011、285

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡部 良典 (WATANABE, Yoshinori)

上智大学・外国語学研究所・教授

研究者番号：20167183

(2)研究分担者

加納 幹雄 (KANO, Mikio)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授

研究者番号：70353381

(3)連携研究者 ()

研究者番号：